

巻頭言「あそび」再考

小田原市教育研究所長 中畑 幹雄

「世の中に寛容さがなくなった」とか、「失敗が許されない風潮がある」と言われて久しい。例えば学習指導では、「正解」を効率よく教える指導にばかり心を砕いていないだろうか。また、子供同士のトラブルの中には、解決を急ぐあまり大人による介入が過ぎ、子供同士の問題解決力を養う場になっていないと感じるケースも少なくない気がする。

自動車の教習所では、ハンドルやブレーキに設定されている「あそび」の大切さを教授された記憶があるが、まさに現代は、「世の中から『あそび』が失われている」と言えるかもしれない。「あそび研究」の第一人者であるヨハン・ホイジンガは、「ホモ・ルーデンス」の中で、「あそびの面白さが文化や文明をつくる」と言っている。あそび心が失われている中では、新たな創造などできないということか。

私が初任で勤めた小学校の理科室には、蒔田晋治氏による詩「教室はまちがうところだ」がひっそりと掲示してあり感銘を受けた記憶がある。間違いや失敗から学ぶ姿勢や心の余裕を、今一度考え直す必要はないだろうか。慶應義塾大学の今井むつみ氏は、書籍「学力喪失」の中で、生活に活かせる「生きた知識」を身に付ける「プレイフル・ラーニング」という理論を紹介している。「学びは遊びだ」と子供たちが思えるようになる手法に、新たな可能性を感じずにはいられなかった。

研究所便り

デジタル版『小田原の自然』分割版

小中学校理科副読本『小田原の自然』は、平成 9 年の初版以来、これまで 18 版を重ねて活用されてきました。右は、海岸・河原・平地・丘陵・山地など目次ごとに表示がしやすい『小田原の自然』分割版の QR コードです。今後の理科学習や自然探索などにお役立てください。



研究所 新刊図書の紹介

教育研究所で新たに購入した図書の一部を紹介します。教育図書は、逓送便で受け取ることができます。教育図書の検索・申込書の印刷・送付方法等につきましては、「市内共有＞99 教育委員会＞05 教育指導課＞23 教育図書」をご確認ください。

分類

信じて支える やりすぎない子育て	稲田 尚久（令和 7 年度教育講演会講師） 著	L
通常の学級で行う「愛着障害」サポート	米澤 好文・松久 眞美・竹田 契一 著	F
ウェルビーイングをデザインする 小中学生の非認知的能力	櫻井 茂男 著	F
リエゾン—こどものこころ診療所— 14 巻～19 巻	竹村 優作・ヨンチャン原作	K

次回のおだわら未来学舎

第 4 回は、昨年度大変好評だった教育講演会の講師、工藤勇一先生による講話です。ご都合により、当初の予定を変更して 11 月 28 日（金）18：10～20：00 オンラインでの開催になりました。（当日ご参加が難しい方向けにオンデマンドでの配信も予定しています。）皆様のご参加、お待ちしております。

小さなころみ「共同研究」

教育指導課指導主事 中野 加弥子

令和6年度までICTの活用に関する共同研究を行ってきました。ICTを個別最適な学びに生かすことで、子供たちの主体的な学びの実施につながるという成果を得ました。その成果を生かし、令和7年度からは「主体的に学ぶ力を伸ばす」研究が始まりました。小学校の先生5名を研究員としてお迎えして9月までに4回の研究会を行っています。研究員は次の方々です。

◎浅田 早百合 教諭（酒匂小） ○土田 崇朝 総括教諭（山王小）
濱田 浩輝 教諭（東富水小） 小林 昂太朗 教諭（千代小）
佐野 花香 教諭（矢作小）

これまでの研究では、子供たちの主体的に学ぶ姿や教師の役割の共有など、研究の方向性について話し合ってきました。研究員の先生方お一人お一人が、現在担任している子供たちの顔を思い浮かべながら、「学び」に対する考えやこれまでの実践を交流する時間になりました。今後は、授業実践に向けて準備を始めます。子供たちが主体性を発揮できる手立てとして、地域教材を取り入れ、その単元計画を話し合い、代表者による授業で研究を深めていきます。授業研究においては筑波大学附属小学校の由井蘭健先生にご指導・ご助言をいただく予定になっています。

主体的な学びの充実と小田原の教材化によって、社会力を育む実践をめざします。子供たちの意欲や学びの積み重ねを的確にみとり評価できる教師の目も鍛え、主体的な学びを支える研究をしていきたいと思います。

ある教室から「子どもの意欲を刺激する」

教育指導課指導主事 神谷 啓之

ある小学校で、社会科の授業を参観しました。

3年生「店ではたらく人と仕事」の単元です。その日の授業のめあては、実際に地域のお店に校外学習に出かけて見つけてきたお店の工夫を伝え合い、考えを広げることでした。

早速、3人組になって話し合います。「ななめに並んでいるから、商品がとりやすいんだよ」「キャベツは使いやすいように、丸ごとじゃなくて半分で売っていたよ」「自動ドアになっていたから、車いすのお客さんでも来やすい工夫だと思う」「いっぱいドリンクが置いてあるのは、人気商品をなくさないため」。どんどん出てくる子供たちが見つけてきた「とっておきの」お店の工夫。一人ひとりの関心の高さがひしひしと伝わってきました。

教室の壁一面には、これまでの学習の足跡をまとめた模造紙の掲示物。子供たちの思いや思考の流れを大切にしながら単元の学習づくりに取り組んできたことが一目瞭然です。

学級全体での話し合い。何のためのお店のか、自分たちだけでは解決することが難しい場面が出てきました。すると、「聞いてみないとわかんないよ」という子供のつぶやきが。「2回目の校外学習につながりそうだな…」などと思いながら聞いていたら、「放課後、お店に集合ね」と子供たち。なるほど、これこそ子供たちの生の思考、本音なのだなと思いました。「本当に知りたいこと」は、「すぐに解決したい」と思うのは当然です。探究への意欲充分な子供たちの姿に感心しました。

子供の「知りたい」を刺激して学習を作ることの大切さを改めて感じる素敵な時間になりました。